

大恐竜展特集号

ソ連科学アカデミー

大恐竜展の開催にあたって

館長 外間 正 幸

● このたび、ソ連科学アカデミー「失われた生物たち—大恐竜展」が、当館と琉球新報社・日本対外文化協会の主催により、11月1日から30日まで、県立博物館で開催されることは誠に喜びにたえません。

この大恐竜展は、ソ連科学アカデミー古生物学研究所が、地質学や地球の生物の進化、特性等の研究を行ない、それらのコレクションの一部を日本の人々に見せるために、本土各地で展示されているのを、当館が特別にお願いして、沖縄でも開催して頂いたものです。

● これらの失われた生物たちは、私たちに、太古の地球について、或は、古代の生物たちがどんな形をしていたか、さらに、これらがなぜ消え去ったか等について、興味深く考えさ

せてくれることでしょう。一方、これらの化石を産する地層を研究することは、地質構造の研究、地下資源の開発にも重要だといわれております。沖縄も古い昔は大陸と地続きの時代があったため、象や鹿の化石等も発掘されており、そのようなことと思えば、あわせながらこの大恐竜展を見ると、いっそう興味がわくことでしょう。ぜひ多くの人々をご覧下さるようお願いしてやみません。

この大恐竜展が沖縄で開催できたのは、ソ連科学アカデミーの移動博物館長N・N・クラマレンコ博士並びに日本対外文化協会の御尽力の賜ものと深く感謝致しております。また、琉球新報社並びに御後援下さった文部省はじめ諸団体、その他関係各位にも心から感謝と御礼を申し上げる次第であります。

昭和55年 9 月



タルボサウルス（復元図）
恐竜のなかでもっとも強いもののひとつ。
大きな強い頭と鋭い歯をもっていた。

大恐竜展 —失われた生物たち—

30億年の旅

初めて地球に生れた「いのち」から
恐竜、マンモスへと、きみはどのくらい知ってるかな！

地球が誕生して50億年ちかく。気の遠くなるような時間の中で、人類の出現はほんの一瞬間のことなのだ。生命はどのような過程を経て、人類へと進化してきたのだろうか。

ナゾに満ちた壮大なドラマを訪ねてみよう。

先カンブリア時代

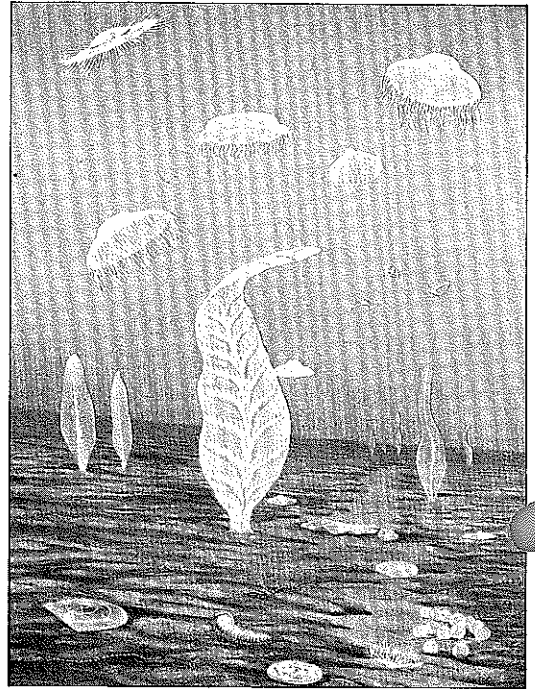
海底をソウ類がただよい、三葉虫や海綿動物が見える。

地球にいのちが生まれたのだ。

地球上の最初のいのちが何であったかは、まだわかっていないが、現存する化石の中で最も古いのはストロマトライト（ラン藻の化石）である。肉眼では見えない単細胞動物のラン藻は石灰分を柱状に吐き出しながら、上へ上へと伸びていった。バクテリアもこのラン藻の表面に生きていた。

先カンブリア時代の終り頃、6～7億年位前、多細胞動物、クラゲ、ウミエラ、ヒドロ虫、サンゴ、ゴカイの先祖があらわれた。これは、エディアカラ地方で最初に発見されたため、エディアカラ動物群と呼ばれている所属不明の動物を含む不思議な動物達である。

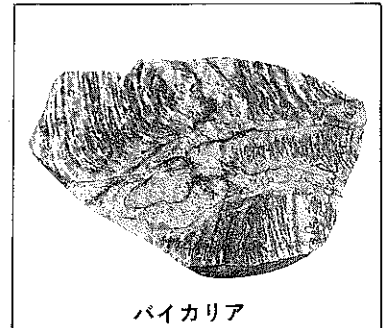
当時の海底は、おそらく右の復元図のような状態だったろうと想像される。ナゾに満ちた時代だ。



ミンジャリアン



ヤクトフィトン



バイカリア

古 生 代

世界中が巨木の林立する大森林。

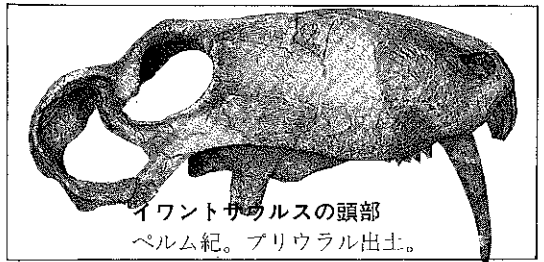
ジャンボトンボが飛びまわって、両生類も栄えていた。

海の中では三葉虫の全盛期が始まりそして絶滅する。又、腕足類、サンゴ、カブトエビ、ウミサソリ、軟体動物である貝類、イカに以たベレムナイト、アンモナイト等もあらわれ、海ユリもあらわれた。

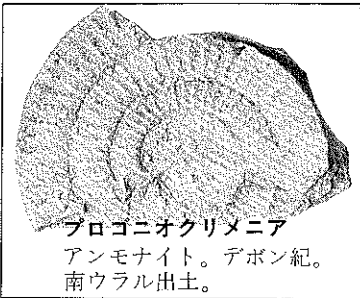
最初の脊椎動物として魚が、甲冑魚や無顎類の魚やヘリコプリオンのように鮫の類もあらわれた。デボン紀にいた総鱗類魚、ラッコグナトスはヒレの骨に関節があって、これが陸上へ這い上ることを覚えた初めての脊椎動物であったと考えられている。後に両生類、爬虫類へと進化するもとである。

デボン紀には又植物も陸へと進出する。始め根も葉もなかった植物は、石炭紀頃には世界中いたる所に巨木の林立する大森林をつくった。これらの樹木は現在、石炭になっている。

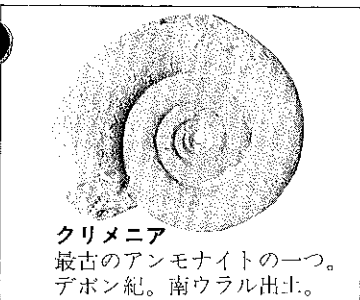
● 植物の繁栄は節足動物、とくに昆虫の発達につながる。此の頃、翅をもった昆虫が汎山あらわれ、現代まで、その多種多様さは他の生物にくらべてもっとも強力な動物群である。トンボ、カゲロウ、ゴキブリ等は現在でも栄えている。昆虫の強さは、木の上、土の中、水の中どこにでも住むことができる点である。節足動物の中で絶滅したグループとしては三葉虫、ウミサソリ等があり、昆虫類、蛛形類甲殻類のように現代でも栄えているものもある。



イワントサウルスの頭部
ペルム紀。プリウラル出土。



プロゴニオクリメニア
アンモナイト。デボン紀。
南ウラル出土。



クリメニア
最古のアンモナイトの一つ。
デボン紀。南ウラル出土。

ペルム紀、三疊紀には両生類、現代のカエルの仲間があらわれる。体は大きく形は現代のワニに似ていたが幼生の頃エラで呼吸していた。体は鱗や角質の甲冑で覆われていた。頭の大きさが一米以上もあるマストドンサウルス等も両生類である。

爬虫類は、両生類よりも進んだ水陸両方の脊椎動物として発達したが最初の中は水辺か水に近い所をすみかとしていた。爬虫類が卵によって繁殖する能力をもったことは陸上の環境に適したので、いろいろな大きさの、草食、肉食爬虫類があらわれた。

その中のエステメムノスノクス、デイキノドン(草食)、イワントサウルス、イノストランケビア(肉食)、等の獣型爬虫類は現在の哺乳類と似た歯の構造、

門歯、犬歯、臼歯の形をしており、又口の構造から唇が軟らかであったと思われるため、哺乳類に不可欠なものを吸う能力を最初に持った動物として、進化の中の重要な役割りを果している。

他の原始的爬虫類、パレイアサウルスは現代の亀の親類だろうと考えられている。此の頃の爬虫類も両生類と同じく、体が角質の鱗や甲冑に覆われていた。

	紀	紀の名前の由来	
新生代 六五〇〇万年前	第四紀 {完新世 更新生}	昔、地層の時代を4区分した時の第3番目と4番目の名が残って今も使われている。 古第三紀	
			第三紀 {鮮新生 中新生 漸新生 始新生 晩新生}
	白亜紀		
	ジュラ紀		スイスのジュラ山脈の名に由来
中生代 二億四七〇〇万年前	三疊紀	代表的に発達した地方で三つの層になっている	
	ペルム紀	ロシアの“ペルム”王国の名に由来	
	石炭紀	世界の有名な石炭層を含む地層の時代	
	デボン紀	イギリスのデボン州の名に由来	
古生代 五億七五〇〇万年前	シルル紀	ケルト族“シルル”の名に由来	
	オルドビス紀	古代ケルト族“オルドビス”の名に由来	
	カンブリア紀	ウェールズの古名“カンブリア”に由来	
	先カンブリア時代	カンブリア紀より古い時代	
四億五億年前			

中生代

ここは爬虫類の全盛時代だ。

恐竜がドスンドスン走りまわり自由に空を飛ぶものもいた。

1億5千万年もの間地球上に存在した恐竜は、その間つぎつぎと現われては絶滅し、進化と環境への適応をくり返しなが、多種、多様な生活をしてきた。現在学術記載がしてあるのが150数種あるが、まだ発見されてない種族を考えても地球上に一時に多様な種類の恐竜がいた可能性は少ない。恐竜時代の絵の中に混然と種々の恐竜と一緒に描かれているのを見るが、おそらく実際にはあり得なかったのではないか。草食、雑食、昆虫食の恐竜とそれを餌にする肉食恐竜はそれぞれの餌の量とバランスを持ち、環境が変わるにつれて、それにみあった形態をつくり出しながら生きていた。

白亜紀の半ば頃、地球の大変化が起った。それは被子植物の大繁殖である。この頃から地球上の植物相は余り大きな変化を起していない。しかし草類は化石になっていないので恐竜が草とどのように関連するのかは不明である。草が多く繁るようになって最も適した環境になったのは哺乳類である。それ迄、体型も小さく、モグラ、ネズミ程の大きさだった哺乳類は此の頃、すでに胎生生産能力をもち始め台頭することになる。



サウロロフス骨格

恐竜絶滅のナゾはまだとけていないが、被子植物の大繁栄の時期に共栄を続けた3千万年の後、角竜やとび竜の仲間の最後に残った恐竜は何かの理由で死滅した。

鳥類が現われたのは、恐竜の絶滅前であり、鳥は恐竜の一部が変わったものだと考えられる。

中生代の終りになにが起ったのか？これが今後の課題である。恐竜だけでなく、アンモナイト、海の爬虫類や貝類の多くが絶滅している。

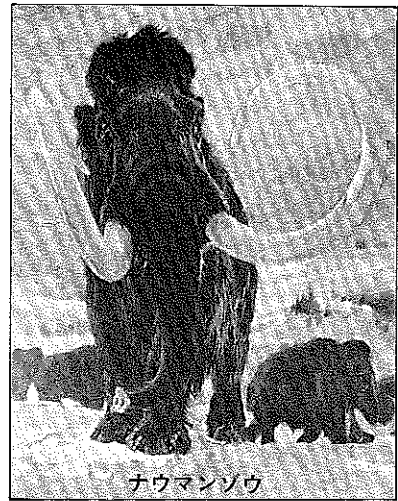
新 生 代

哺乳類の時代がやってきた
 人類の祖先がマンモスを追っもうすが
 たをみせている。

哺乳類が体型を大きくし、つぎつぎに現われてきた。モンゴロテリウム、エンボロテリウム、エンテロドン等、雷獣類から、ヒッパリオン動物相に属するインドリコテリウムは象よりも大きくキリンのように長い首と足をもったサイであった。サイにはいろいろあって小型のブラビオテリウムやキロテリウム等も角のないサイである。

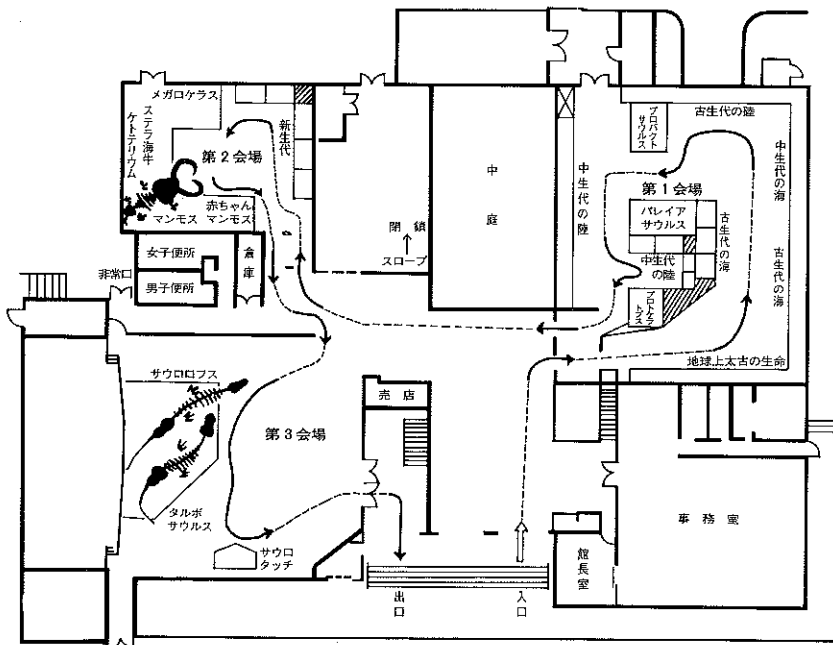
の先祖にあたるヒッパリオンの歯は非常にかたく日本でも化石が出ている。この動物相にはハイエナ、サーベルタイガー（剣歯虎）等の肉食獣や、マストドン象等も入っている。マストドンは、現在の象のような臼歯ではなく、上下に数本ずつの歯が乳房状に並んではいているためにこの名がついた。

マンモスが現われたのは人間と同じ頃である。寒さに強い皮下脂肪をもった大型の象は人間の狩獲の対象となったが、絶滅した理由は判らない。1万年位前に絶滅したマンモスは、シベリヤの永久凍土に、そのままの姿で冷凍され埋まっていることが多い。氷河期を生きぬいた此の動物が絶滅したのは、この地方、ユーラシア大陸が一時的に温かくなりすぎたため氷がとけ、土の中に埋まったためではないかとソ連の学者は考えている。



ナウマンゾウ

大恐竜展会場案内図



(注) ・会場は、3つにわかれております。
 ・進路は、矢印(→)のとおりです。

— 主な展示物 —

1. 太古の生命

- ヤクトフイトン
- ミンジャリアン
- バイカリア
- テイラジアナ
- プトリジニウム

2. 古生代の海—その1

- 海ユリ
- スボラドセラス
- ポロホセラス
- プログニオクリメニア
- プロロビテス

その他

3. 古生代の海—その2

- ポトリオレピス
- トールノセラス
- テイマニテス
- イゾゴモケラス

- パラガストリオケラス
- ネオグリフイオケラス

4. 古生代の海—その3

- ヘリコプリオンの歯
- ヘテテス
- ホリスチラス
- ガラソセラス
- ネオプロホリテス
- アリストテラス

5. 中生代の海

- スビドニセラス
- ウエルガチテス
- クラスベヂテス
- ツイリンドルテウチス
- パテプチス
- リンホネラ
- プレウロトマリア
- その他

6. 古生代の陸

- プラチオボザウルス
- エリオスークス
- トーソークス
- イワントサウルス
- デイキノドン
- バレリアサウルス
- ドウイノサウルス
- エステメノスークス

7. 中生代の陸—その1

- タルボサウルスの頭骨
- サウロロフスの頭骨
- カラウルス
- サウロタッチ
- タルボサウルス
- プロトケラトプス
- シッタコサウルス

8. 中生代の陸—その2

- ワニの歯
- ソルダス
- モンゴロテリウム
- エンテロドン
- エムボロテリウム
- キロテリウム
- ガリミムス

9. 新生代

- ケルビトス
- ヒッパリオンの頭
- ハイエナ
- サハリノケトス
- ステラ海牛
- マンモス
- プラチペロドン
- ジゴロフオドン
- エラスモテリウム
- その他

第10回九州博物館協議会 (学芸員・事務職員研修会)

▲ 日 程

- 9月11日 (木) 第1日
 - 9:00~9:30 受付
 - 9:30~10:00 開会・あいさつ・日程説明
 - 10:00~12:30 講演
 - 私の見た外国の博物館
琉球大学教授 野原朝秀氏(地質・古生物学)
 - 沖縄の歴史的特性
沖縄大学前学長 安良城盛昭氏(歴史学)

- 12:30~13:30 昼食・休憩 13:30~14:00 会場移動
- 14:00~15:00 沖縄県立博物館視察研修
- 15:00~15:40 情報交換(協議等)
- 15:40~17:00 首里の史跡見学、徒歩で宿舎へ
- 18:00~18:30 琉球芸能鑑賞 18:40~20:40 懇親会

● 9月12日 (金) 2日目

- 9:00~17:00 現地研修 読谷村立歴史民俗資料館
→東南植物楽園→玉泉洞→那覇市・解散

昭和55年度特別展案内 (特別展) (◎は当館主催)

○中国水墨画 5人展

9月17日(水)~9月25日(木)

○安次富長昭「抽象への展開」展

10月5日(日)~10月15日(水)

◎失われた生物たち—大恐竜展—

11月1日(土)~11月30日(日)

◎義村朝義展

昭和56年1月10日(土)~1月25日(日)

◎渡名喜島展

2月3日(火)~2月22日(日)

○首里高校染織デザイン科卒業作品展

2月26日(木)~3月1日(日)

昭和55年度博物館文化講座

時間 ▶ 午後2時30分~4時30分
会場 ▶ 当館講堂または特別展示室

- 9月7日(日) 南部の史跡めぐり
博物館学芸員 知念 勇
- 9月27日(土) 首里の織物
琉球大学教授 大城志津子
- 12月20日(土) 戦後沖縄画壇のあゆみ
琉球大学講師 仲井間憲児

- 1月31日(土) 沖縄近代史の人物群像
琉球大学助教授 比屋根照夫
- 2月21日(土) 考古学よりみた渡名喜島
教育庁文化課 当真嗣一
- 3月28日(土) 本土出かせぎ移住について
沖縄国際大学助教授 石原昌家

特 別 講 演 会

11月1日(土)

◎琉球の自然と自然史博物館

北九州市自然史博物館準備室次長 太田 正道

◎日本の古脊椎動物と琉球列島

横浜国立大学教授 長谷川善和

時間 午後2時30分~4時30分

会場 沖縄県立教育センターホール

沖縄県立博物館だより No.9

発行年月日 昭和55年9月10日

編集・発行 沖縄県立博物館

住 所 〒903 那覇市首里大甲町1の1

TEL 0988-86-4353

84-2243